① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第11巻　第8号　1966年8月25日　大町山岳博物館

夏山パトロールを終えて

夏山ブームと云われる程に登山客が多くなってまいりました。私共は毎年夏山衛生パトロール隊を組織して山小屋の衛生管理、飲料水の水質検査、山小屋従業員の保菌検査、山小屋の食事の指導、登山道路の清掃指導等、登山客の山の生活の快適を願い努力致してきております。

今年も七月二十一日から八月六日までの間に四班編成で延六〇人を繰り出して実施してまいりました。これらの結果については、二十九日の夏山衛生の反省会に出され検討されますが、今年の監視の結果の概略は次のとおりでした。先づ登山路の清掃では、昨年に比較して良くなってきました。これは白馬村を中心とした夏山美化推進会が組織されて、登山路の清掃を行なった為と思われますが、場所的には、紙屑等が散乱し不愉快の念を禁じ得ませんでした。

これは登山客一人一人の心掛が、この問題を解決してくれる唯一のものと思われます。

さて山小屋の関係になりますと、甚だ遺憾の点が多く、山小屋経営者の今後の努力が、強く要請されるところであります。今年の山小屋で最も悪く思われる点は、ごみ処理、し尿処理の不完全、飲料水の消毒が不完全、未検便者が多い、ねずみの駆除がなされない等でしたが、これらの点は、反省会でそれぞれ検討され、経営者に指示し解決していきたいと思います。

次回は山小屋の監視指導成績を述べ、皆様の御参考に供したいと思います。

大町保健所　臼田周三郎

…此…頃…の…山…で…

田淵行男

受難の高山蝶

今春以来私はNHKの自然のアルバムのロケ班に随行して高山蝶の姿を求めて歩いている。その間いたる所で予想外の事態に出会って驚いたり困ったりしている。残念なことにそうした現実には一つとして明るいムードは感じられなかったし、案内役としての責任上私は全く途方に暮れたことも度々であった。

こんな筈ではなかったがと考えこんでみてもそれが現実の山の姿であり、高山蝶を通してみる山の自然の移り変りなのである。

常念乗越しは高山蝶の宝庫といわれるくらいタカネヒカゲとミヤマモンキの豊産地であった。私がこゝを先づ第一のロケ地としてロケ班を案内したのは当然である。ところがこゝの事情もまるで変っていた。

尤もこゝ数年来この一帯の高山蝶がめっきり少くなったことは承知していたが、まさかこんなにひどい減少振りとは思いがけなかった。乗越し一帯は私の十数年間に亘り親しんだ所である。この地の一木一草、一ッの岩屑も馴染み深いフィールドといってよい。ところがそうした長年の実績もまるで役に立たぬ有様、撮影の材料を探すのに四苦八苦、ロケ班は無論のこと、小屋の人達総動員の協力で漸く間に合わせるといった始末であった。

その間、つくづく山の移り変りを痛感させられた。中でも私の強く心を打たれたのはそうした取材の間に三度も高山蝶の死骸を拾ったことである。つまりタカネヒカゲの幼虫と蛹の無惨な圧死体をみつけたのであった。

一体、この高山蝶の幼虫は握りこぶし大の岩屑の下にかくれて二冬を越す、高山蝶特有の珍しい習性を身につけている。どうやらそうした棲家に選んだ石の下でおしつぶされたものらしかったそのうちの一ッは蛹になっていた。

私の心を暗くしたのはそうした事故のあったのが普通の通り路からかなり離れた所であった一事である。元来この蝶のもともとの棲息地は乗越一帯であったがこの元住地からは大部前に締めだされて、いわば二等地、三等地ともいうべき不利な一ノ俣寄りの斜面に、殺到する登山者を避けて細々と暮らしていたわけである。

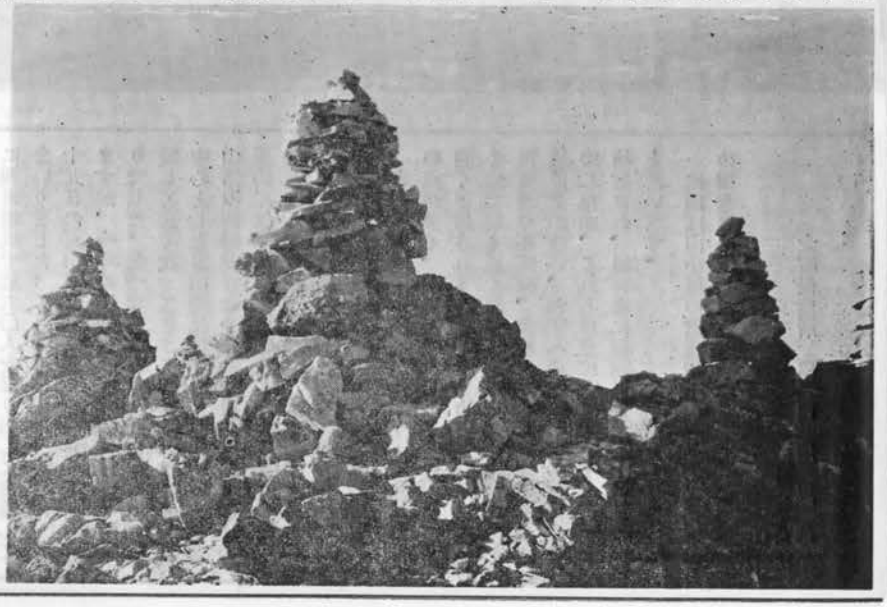
それが尚且つこのような悲運の避けられなかった点である。それ程この一帯は登山者が歩きまわるのである。もはや山の小動物にとって安住の地はどこにも見出されないのである。非業の死を遂げたタカネヒカゲにしてみれば人間の進出による交通事故ともいうべき深刻な事態とも考えられるであろう。私はこの三つの小さな山の動物の亡骸を手のひらに眺め乍ら山の自然保護のむづかしさと、高山蝶の行末について考えこまざるを得なかった。

受難のタカネヒカゲ（常念乗越にて一九六六・六）　左は蛹、他は五令幼虫

ケルン禍

夏としては珍しい好晴に恵まれた爺ケ岳の山頂は大変な賑わいであった。地元の団体が二つ前後して山頂で合流したからである。私は三脚を立てる場所のないのに困惑しながら、山頂に林立する一つのケルンの根元にザックをおろしカメラを出した。そのうち団体が次第に山頂を去り、賑わいは下火になっていった。それと入れ代りに数人のパーティーが登ってきた。その中の一人の女性が疲れたといいながらいきなり私の目の前に立つ等身大のケルンに寄りかかった途端に上方の頭程の石が落下した。幸い怪我はなかったが私はつい驚きの声をあげてしまった。

そのうち私のザックを置いた傍のケルンに一人の若者があっというまに飛びのった。止めるまもあらばこそである。というのはそのケルンの下に私は商売道具のカメラを広げていたからである。万一崩れでもすれば被害は甚大である。私ははら〳〵しながら見守るば



狭い山頂に林立するケルン（前穂高）

かりである。今更下手にアッピールしてケルンを崩されでもしたらそれこそ藪蛇である。その若者はそうした私の心情にはおかまいなく石積みの上でカメラを向けている。幸いそのケルンは安定性にすぐれていたので事なきを得たが、その間私は冷汗三斗の思いであった。僅か一米ばかり高くなったからとて眺望に変りがあるわけでもあるまいにと腹を立てみても、高い所に登りたくなるは人情、確かに山頂のケルンはそのような無謀な登高慾をかきたてる一面がある。

必ずしもこの二つの事件を根拠に云うのではないが、この頃の山のケルンについては目に余るものがある。そろそろ登山のモラルとしてケルンを積むことを禁止してはどうであろう。

昔はケルンは山路の道標としての尊い役目があったし、真しな山男の登頂の感激のシンボルとして尊重されたが、この頃では道標はほぼ完備し、その必然性は失われた。この頃のケルンは大部分はひまつぶしのいたずら半分の所産である。それでなくてさえ狭い山頂に所せましと林立するケルンは、第一危険であるし、交通をさまたげ、山の美観をも損する。

その上私の最も気になることは勝手に軽々しく山の自然を改変する気風を助長していることである。自然保護は高山植物にばかり当てはめるべきではなかろう。もっと広く、深く解釈されるべきである。その意味からもケルン乱造は禁止されるべきである。

私はかって涸沢に面した涸沢岳の一角に危険にきわまるケルンを見出だし肝を冷やし早々に取り除いた覚えがある。その下方はルートになっているのである。崩れでもしたらどうなるであろうか。

山頂のケルンを整理し、山頂の安全と美観を確保し、ケルンによる事故を未然に防せぐ意味からケルンの建造を禁止することを提唱したい。

(日本昆虫学会々員、山岳写真家)

恐るべき家畜

山へ登るドブネズミ

宮尾嶽雄

台所や下水溝などにチョロチョロしているドブネズミを知らない人はないだろう。

現在南極圏の南ジョージア島から北極圏のスバールバル諸島、アリューシャン列島、アラスカ、シベリアに至るまで、世界中、人間の住んでいるところなら、必ずドブネズミも棲んでいるといってよい。

中央アジアの裏海沿岸、バイカル湖附近などに野生のものが生活していて、この辺が原産地と考えられているが、ヨーロッパに入ったのは一七〇〇年代、アメリカに侵入したのもコロンブスの大陸発見以後で一七七五年頃と判明している。日本にはいつ頃入ってきたものか明らかでないが、比較的最近の歴史時代であることは確かである。陸上・海上交通の発達に伴ない、ドブネズミは人間と一緒に世界中に拡がり、人間から餌をもらって、おどろくべき勢力を確立したのである。

国連食糧農業機構の調査によれば、極東では穀物の全生産量の二〇%以上がネズミの餌になっており、世界全土の平均をとっても農産物の一〇%以上がネズミに食われているという。これは世界の農民の十人について一人、アジアでは四人に一人がネズミを飼うためにただ働きをしている計算になるのだ。この被害の中にはクマネズミ・ハツカネズミその他によるものも含まれてはいるが。Henderson and Craig (1932) は、家畜の定義を次のように述べている。

『ヒトの生活に密着して生活することに適応し、ヒトの住家のまわりに、ヒトの許可を得て住んでいる動物』。ヒトは、好意をもってドブネズミの生活を許容しているわけではなかろうが、時々思い出したようにワナをかけたり、毒餌をまいたりする位で、一般的にはその生活を黙認している状態に近いし、台所や食糧倉庫の防鼠設備も、それをしようとする意識も非常に低いところをみると、ドブネズミは、まさしく家畜の定義にあてはまる。

少なくとも野良犬や猫程度には。ドブネズミ類が地球上に出現したのは今から百万年位以前のことで、ヒトの起源とほぼ時代を同じくする。そして、ネズミ類は一般に、小型化する傾向があるのだが(最も古いネズミ類の祖先と考えられているものは、現在のウサギ位の大きさがあった)、ドブネズミは、ヒトの生活との結びつきが進むとともに、言いかえれば家畜化が進むとともに、体が大型化し、一回に産む仔の数も増加してきた。これは、ヒトの文明の産物である上質の餌が保障された小さな生活空間への特殊化と考えられる。

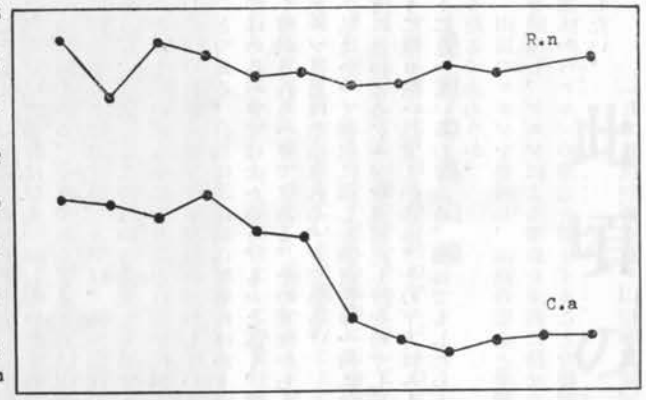
農村のドブネズミよりも大都市のものがずっと大型で、繁殖力が強いのも世界的な現象でヒトの生活水準のちがいをそのまま表わしているのは皮肉である。

このドブネズミが最近、山へ登りだした。言うまでもなく、登山人口の増加に伴ない、山小屋や旅館が増加し、上質な餌がふんだんにまきちらされているからである。食糧の荷物の中や、建築資材にまぎれこんで山へ登るのである。筆者がドブネズミを採集した山々を挙げてみると、長野県では乗鞍岳、上高地白馬岳、八ヶ岳、忘賀高原などで、有名な観光地と化した山々には、現在必らずドブネズミがいる。この中で志賀高原では二年間にわたって、山におけるドブネズミの生態を調査してみた。二年間に合計一、〇二六匹のネズミが採集されたが、そのうち四八六匹(四七・六%)がドブネズミであった。これらはいずれも野外にワナを仕掛けて採集したものでハイマツの下や、ササ原、白樺林の中、海抜二、三〇〇米の横手山頂上でもドブネズミが多数生息している。

寒い高原の冬にも、雪の下で繁殖活動を続け、その適応力は恐るべきものがある。本州の山野に最も普通にいるノネズミは、アカネズミ、ヒメネズミ、ハタネズミ、ヤチネズミなどであるがこれらのネズミでは、少なくとも本州中部地方山地においては、冬には精巣や卵巣が萎縮して、繁殖活動が停止し、初夏から秋にかけての短い期間だけに出産する。一回の平均産仔数はヒメネズミ、ハタネズミとも四匹、ヤチネズミは三〜四匹、アカネズミは五〜六匹である。これに対して、ドブネズミは志賀高原でも一回八匹を産み、冬でも生殖腺が萎縮するようなことがない。体の大きさも、最も大型なノネズミであるアカネズミが六十グラム以内であるのに対して、ドブネズミは三百五十グラム以上にも達するのである。大型であることは、生理的恒常性を保つのに有利でもある。

志賀高原の中でも、特に丸池、熊の湯、木戸池、発哺など、人の集まる所ほどドブネズミの数が多く、夏から秋に個体数はピークに達する。筆者らは、ドブネズミのとれる割合を、その地域の『環境汚染指数』と名づけようと考えている。

ドブネズミはノミやダニの他にも、食中毒



ドブネズミ(R・n)とヤチネズミ(C・a)の精巣の大きさの季節的変化を示す

の原因となるサルモネラ菌などを無数に保有しており、特に今後、山小屋などで集団食中毒などが発生しはしないかと、警告したい。例えば、新聞記事によると昭和十一年には、浜松市では二千人以上もの人が食中毒になり四十五人が死亡したことがあったが、これは市内の運動会にくばった大福モチについていたサルモネラ菌類によるものだったし、身近な例では、昨年の五月二十六日から六月五日にかけて長野県下高井郡山の内町（志賀高原の麓である）夜間瀬西部保育園に発生した三十七人の疑似パラチフスも、ネズミの媒介による細菌性食中毒であるとされた。

このような事故が山小屋で発生したら、そのまま大量遭難にも連なるであろう。この小稿で特に問題にしたいのは、人為的に運ばれたドブネズミが、高山においても、餌に恵まれて繁殖し、本来の高山動物相を圧倒して、自然のバランスを大きく変化させるのではないかということである。そして、それに関連して声を大にして叫ばなければならないのは、自然が人類共有の財産であり、そこから計りしれない人類の叡智が引き出され得る銀行預金のようなものであるのだが、それが国立公園・国定公園の指定というような空虚な名声のために、どれだけ破壊されてきたかということである。自然公園法によれば、国立公園は厚生大臣が指定し管理に当る。国定公園は厚生大臣が指定し、都道府県が管理するとなっている。そして自然公園法の主旨は、〃自然の景観を保全し〃、公共の公園として観光レクリエーションに役立たせることにあり、個人や一部の人間のために私有されてはならない筈である。

しかし、実際には自然公園法の目的と相反する土地利用が公然と行なわれていることは誰でも気がついている。厚生大臣や都道府県は果して自然公園法に対して責任を果しているだろか。最近、社寺の重要文化財や国宝に指定されているような仏像その他が、売却されたりして、その管理者の責任が問題にされたりしているが、（その場合でも、責任の所在はもっと別のところにある筈だと思うのだが）、この方は、所有者が代っても、その『物』は存在するから罪は少ないが、自然公園の場合には、自然そのものが失われて、再び回復できないのである。管理者の責任ある施策が望まれること切である。そうでなければ、国立公園とか国定公園の指定というような事は一部観光資本に対する無料で、しかも効果の大きい広告を、厚生大臣が提供しているだけにすぎないのではないか。

日本の現状からすれば、まだとるに足らない問題かもしれないが、そろそろ生態学的に根本的な論議が展開される必要があろう。

一匹十円でネズミを買い上げるというようなやり方は施策として全く無意味といってよい二・三ケ月もすれば個体群は旧に復するからである。

×――×――×

〃Rat〃という語には、ドブネズミ・クマネズミを意味するほかに、『こそどろ』、『卑劣漢』、『裏切者』といった意味が含まれ、映画『シェーン』にも、シェーンが、ジャック・パランス扮する黒づくめの殺し屋クリスに〃Rat〃とののしられる場面がある。

英名でドブネズミのことを、〃Norway rat〃ともいう。(学名もRattus norvegicus)、ドブネズミのヨーロッパ侵入以来、その害に閉口していた頃、ノルウェーの海賊が海上を荒らしまわり、それに手を焼いた英国でノルウェー人を、『ドブネズミのような野郎』といったことからはじまっている。

（信州大学医学部第二解剖学教室）

足尾からのカモシカ死ぬ

栃木県や、足尾町からの依頼を受けて、当市立大町山岳博物館に引き取った特別天然記念物カモシカ（生後推定六ケ月）雄は八月二十三日死んだ。

このカモシカは八月十三日折から足尾町附近をおそった豪雨のため、親から離れたカモシカが、雷鳴や雨をさけるため銅山の坑内に入ったと思われ(足尾町役場の話)八月十六日午前十時三十分頃、坑内を見廻っていた同町洞道、小桜信雄さんによって保護されたもの。

国から引き取ったらどうかとの話しがあり地元でもそのことを望んでいるようなので十七日職員二人を派遣して引取ることにした。カモシカは八月十七日午后九時前、車で本館に到着したが到着時衰弱が甚だしいので、獣医が強心剤や栄養完腸を施し安静につとめ、又翌十八日には、止血剤を打って引取り時からの鼻血をとめた結果一時小康状態を保ったが、昼近くの便がくずれて軟便が続いた。その後新鮮な植物や水を与えて様子を見ていたが、二十日から二十二日にかけ便も固まり始め元気を取り戻すかに見えたが、その矢先の死亡だった。横沢獣医の解剖結果では、右胸第六、第七、第八の肋骨が骨折しており、肺炎、胃腸カタルを起して、内臓各所に出血がみられ、それらによる衰弱死と推定された。カモシカは今後骨格標本にし、研究資料として保存する。

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

剣沢より剣岳山頂を望む

撮影　北沢成行

山と博物館　第11巻第8号
一九六六年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部